

高句麗都城の考古学的研究

千田剛道

高句麗は中国東北に起こり、次第に領域を南にひろげ、最盛期にはその版図は朝鮮半島中部にまで及んだ。高句麗都城の変遷は遷都を基準として前期(前1世紀初～3世紀初)、中期(3世紀初～427年)、後期(427～668年)に区分される。本研究は、中国(遼寧省桓仁：前期都城、吉林省集安：中期都城)、北朝鮮(平壤：後期都城)、に所在する遺跡・遺物を中心に検討を加え、考古学から見た高句麗の都城の様相をさぐったものである。

高句麗都城の研究史をたどると各時期の様相、ひいては全体像について、見解の相違が著しい。その主たる要因に遺跡・遺物の年代観の問題が横たわっている。このため本研究では、中・後期都城遺跡で普遍的に出土し、年代の基準となる瓦の編年研究に力点をおき、新たな編年案を構築し、考察の基礎に据えた。瓦の存在しない前期都城では土器の年代観によって検討した。

以上の基礎にたつて、高句麗都城を構成する山城と平地城の様相を時期ごとに検討し、次のような結果を得た。

前期では、まず桓仁の五女山城をあげる。この山城は、岩盤の屹立する天然の要害をなし、頂部の細長い平坦地には、少数の礎石建物に加えて、鉄製武器・武具の出土する多数の半地下式住居、飲料水を得るための池などが設けられている。この遺跡では瓦は出土しないものの、出土土器から高句麗の山城であることは動かない。ただ、中腹の一部に設けられた門をとまなう石築城壁は、集安山城子山城の城壁の築造型式の年代観を援用すると、その築造は6世紀後半をさかのぼることはない。前期の平地城については、候補にあげられている二箇所の土城のうち、現在ダムに沈んでいる蜷蛤城の可能性が高いと判断する。もうひとつの下古城子土城は、版築城壁の下層で検出された土坑出土の土器からみて初築が高句麗時代に下がるのが明らかで、漢代の県城を高句麗時代に転用したとするこれまでの解釈は成り立たなくなった。

中期の平地城は4世紀代からの瓦が出土する石築城壁をめぐらす通溝城である。瓦の分布からみて王宮など中枢部は中央南よりに存在した可能性が高い。通溝城の石築城壁の下層で検出された土築城壁については、漢玄菟郡下の県城で、これを高句麗時代に再利用して石築に改造されたと解釈されてきた。しかし、高句麗の方形土城は桓仁下古城子土城にみられるから、通溝城の土築城壁が高句麗時代である可能性も出てきたと考える。

次に、問題になるのは通溝城とセットになる山城の実態である。従来、中期の山城とみなされてきた山城子山城は、現存の石築城壁や、城門、そして石築の「瞭望台」とその背後の礎石建物、そして長大な建物や八角形建物などからなる「宮殿址」など城内の主要施設の築造は、それらに伴う瓦の年代観を媒介にすると6世紀後半以降の築造となる。文献史料によると、高句麗王都は、3世紀代に魏、4世紀代に前燕の攻撃により壊滅的な打撃を受けている。その際の王都には山城が含まれていることが想定されてきているが、山城子山城では、3、4世紀代はもとより5世紀代の土器などの遺物も知られておらず、出土遺物から初築年代をさぐるには限界がある。これに関連して遺構の面からは、城内に分布する未発掘の積石塚、封土墳の様相がひとつの手がかりになることをも述べた。

後期は、前期平壤城(427～586年)と後期平壤城(586～668年)に細分される。前期平壤城の王宮は平地城である清岩里土城と考え、城内に王宮推定地を提示した。その際王宮建築は瓦葺きでない可能性をも示した。前期平壤城の王宮には、従来から土城である安鶴宮遺跡をあてる見解も根強い。安鶴宮遺跡で発掘された大規模な宮殿風の建築群に伴う瓦は高麗時代に降るものであって、高句麗都城ではありえないことを述べた。また、安鶴宮遺跡の前方に壮大な条坊区画を想定する説についても考古学的な根拠はなく成り立たない。後期の山城としては、数箇所のみと大きな谷を城壁でかこみ、城内に多数の池を擁する大城山城が平壤遷都当初から高句麗滅亡まで存続していることは、城門址出土瓦からも明らかである。後期平壤城の段階には、現在の平壤市街地中心部に、小丘陵を含む山城的部分と、方格地割りを持つ広大な平地を含めて全体を城壁で囲む大規模な城郭を新たに造営する。王宮の推定地である小丘陵の平坦地部分には瓦、礎石の存在が知られているが、なお、王宮建築の詳細は不明のままである。

以上の検討をもとにして、高句麗都城の変遷は次のようにまとめられる。山城と平地城からなる高句麗都城の基本的な構成は、前期で確立していることはほぼ確実である。中期における山城の存在は考古学的資料からは確認できないことになった。後期では、前期平壤城については有力な候補地である清岩里土城の状況から王宮は瓦葺き建築ではなかったことを示唆する。また、清岩里土城内に瓦葺きの仏教寺院が併存していることは高句麗後期都城の特質の一つとしてあげることができる。後期平壤城(長安城)は、城内に、一般民の居住を前提とした方格地割を設けており、中国都城から取り入れた要素である。

このような種々の特質をもつ高句麗都城にたいして、本研究は考古学的な面からひとつの確実な基礎を提供できたと考える。

審査の結果の要旨

1. 本論文の特色

- (1)本論文は、戦前に日本が発掘し、戦後は中国や北朝鮮が発掘したために資料が散在し、遺跡自体も中国東北部と北朝鮮に分かれて存在するために、これまで全体像の把握がきわめて困難であった高句麗都城の分析・解明に果敢に挑んだ点が、第一の特色である。
- (2)本論文では高句麗都城でセットをなす平地城と山城の変遷を、前期・中期・後期に大別し、後期をさらに前期平壤城と後期平壤城に細分して検討している。個々の遺跡や遺構の年代判定にあたっては、土器や遺構自体の様相だけでなく、著者が長年研究してきた高句麗瓦の編年に大きな威力を発揮させて決定する点が第二の特色である。
- (3)その高句麗瓦の編年も、これまでは中国東北部地域と北朝鮮地域でそれぞれ別個に検討されてきたが、本論文ではこの二地域を統合して、先行する卷雲文瓦と後出する蓮花文瓦を連続的に扱い、高句麗が存続した全時代におよぶ全体編年を樹立した点が第三の特色である。
- (4)つまり、単なる遺物の編年作成にとどまることなく、編年作業の本来の目的である遺構の年代決定と同時期以降の配置決定から高句麗都城の構造を明らかにした点が第四の特色である。

その結果、前期では蝸蛤城が平地城の可能性が高いと認定され、セットとなる山城は五女山城となった。

中期の平地城は通説通りに通溝城であるが、セットとなる山城は通説の山城子山城の場合、遺構は6世紀の後期平壤城の時期になることが判明して、比定が困難になった。

後期は、まず前期平壤城を清岩里土城にあてて、北朝鮮が主張する安鶴宮説を瓦の年代論から否定した。後期平壤城は現在の平壤市街地を中心とする地域にあてて、セットになる山城は後期の全期間を通じて大城山城であったという結論を得た。

2. 評価

なによりも、疎略な戦前の調査報告書や中国・北朝鮮の発掘調査報告書を、申請者は時間をかけて精読し、遺構を丁寧に検討して、高句麗都城の全体的な様相とその変遷過程を考古学的に明らかにした点に大きな独創性がある。千田編年ともいべき独自の瓦編年の樹立と暦年代比定も、重要な成果である。こうした検討を踏まえて提出された安鶴宮建築群出土瓦高麗時代説は、これまでの高句麗時代説を覆す重大な説となった。ことがあまりにも重大なために、ほかの論者は二の足を踏んでいる現状だが、軒平瓦とのセット関係も踏まえて提起された本論文は、きわめて説得力に富んでいる。

また、「前期、中期、後期の都城所在地にあるからその時期の遺跡だ」とする安易な論調に同調することなく、それぞれの遺構を実態に即して丁寧に検討している点も重要で、その結果、高句麗前期の山城とされた五女山城も、麓に部分的に設けられた石積みは、その構築技法から6世紀より古くならないとするなど、きめ細かく検討している。

全体として、申請者が長年蓄積してきた研究成果を体系的にまとめた労作であり、博士論文として十分な水準にある。

公聴会は2014年1月30日に実施し、討議は活発で、申請者はそれに明確に回答していた。